

Fashion theory : the journal of dress, body and culture

(ファッション・セオリー)

Oxford : Berg , 1997—

1997年3月に創刊され、年間に4回刊行されている投稿論文誌である。ファッションがさまざまな学問分野の研究対象になってきた20世紀末期に、従来のようなヨーロッパやアメリカを中心とした研究だけでなく、世界に視野を広げて服と人とカルチャーの関係を解き明かしていこう、という画期的な意図から生まれた学術誌である。

編集長は服装史の分野に文化史を取り込んで研究成果を残してきているヴァレリー・スティール (Valerie Steele)。イェール大学で歴史博士号を取得しスミソニアンでフェローシップ、その後FIT (Fashion Institute of Technology) の教師を経て現在はFITのミュージアムの主任キュレーターとして活躍しマスメディアにも登場している著名人である。スティールはvol.1, no. 1でこの学術誌の意図と研究領域について次のようなメッセージを掲げている。

「さまざまな学問領域において身体研究の重要性を論述する場が確立されてきている。それとは対照的にファッション研究は現在にいたるまで批判的な分析が行なわれてこなかった。しかし研究者たちは、タトゥーやピアシングといった身体加工を含むセルフ・ファッションング (self-fashioning) に、文化的な意味があることに気づいてきている。本誌『ファッション・セオリー』では、ファッションとはアイデンティティを内蔵した文化的な構築物である、と定義し出発点としている。その目的は、^{てんそく}纏足からファッション広告にまで及ぶ文化現象を厳密に分析するための学際的なフォーラムを提供することにある」。

セルフ・ファッションング、つまり自分をファッション化する (=構築する) という行為に注目してその意味と文化背景を考えようという姿勢である。編集の意図は現在まで掲載されてきた刺激的な論文やエッセーに反映されており、投稿者は西側からだけではなくアジアや中東イスラム圏、そしてラテンアメリカにも広がろうとしている。従来から主流であった西側の服装史研究の面でも、ソ連時代のロシア社会主義者のファッションや、ナチス時代のドイツやファシズム時代のイタリアのファッションなど、これまでの服装史では除外されてきた分野が掘り起こされ新しい課題が生まれている。また植民地時代の近代化政策がエスニックな服装を変えていったプロセスや、植民地独立後から現在までの変化を報告する論文には教えられることが多い。これまでにカンボジア、ジャマイカ、ガーナ、ケニア、インドなどからの報告がある。「ファッションとオリエンタリズム」と題した特集号 (vol.7, no.3/4 2003年) では、西側のリベラルな都会人のあいだに急速に普及してきた食や衣や映画などのアジア・ブームに触れて、インドやヴェトナムのファッションの現況やエキジビションからの報告を通して、多文化時代のオリエンタリズムを論じている。

西洋圏ではない国や地域の研究家が自国の服装の意味や歴史やカルチャー背景を著述していることと、西洋ファッションの枠を超えて幅広い問題が提起されてきていること、現在起きている現象を視野に入れていることが、この学術誌のユニークなところであり、読者にとっては多様な服装研

究に出会えることがうれしい。授業の進め方のアイデアを与えてくれる論文も多い。たとえばヘア関連の論文集 (Fashion in hair) はアフリカ系アメリカ人やブラックアフリカンのカルチャーを考える入り口になった (vol.1, no.4 1997年)。またチェディー (Janice Cheddie) の「政策が先行：市民権運動時代と黒人モデルの登場」(vol.6, no.1 2002年) は黒人女性と女性美との葛藤の歴史にアプローチするきっかけになった。グインディ (Fadwa El Guindi) の「ベールのレジスタンス」(vol.3, no.1 1999年) は、中東の歴史とイスラムカルチャーの視点からベールを読み取ることの重要さと、西側からイスラムのベールを論ずることの無謀さを示唆してくれた。変わったところではコール (Shaun Cole) の「マッチョマン：クローンと男のステレオタイプの登場」(vol.4, no.2 2000年) は、ゲイ・カルチャーを調べるきっかけになり、視野を広げることができた。

投稿者はほとんどが大学教師や研究者やドクターコース在籍者であり、専門分野は社会学・カルチャー研究・人類学・美術史・歴史・文学・デザインと広範囲にわたる。投稿者の背景や視点が多様であることが、人のアピランスの多様性とそれが伝えるメッセージの奥深さを認識させてくれる。投稿論文は著者の単行本の出版に先駆けて掲載されることが多いので、本を購入する場合に参考になる。また書評やエキジビションの評論は情報を得るのに便利でもある。編集者が意図した学際的フォーラムは着実に根付いてきていると思うが、今のところ日本からの投稿論文がないのがさびしい。日本の学生服を取り上げた論文がこれまでに2編あるが (vol.1, no.2, vol.6, no.2)、いずれもアメリカの学者による日本論になっている。

編集委員は錚々たるメンバーで構成されており、14名でスタートしたが現在は23名に増えている。発刊当時からのメンバーにはホルランダー (Anne Hollander; New York Institute for the Humanities)、ペロー (Philippe Perrot; École des Hautes Études, France)、リベイロ (Aileen Ribeiro; Coutauld Institute of Art)、テーラー (Lou Taylor; University of Brighton, UK)、ツェーロン (Efat Tseëlon; University College Dublin)、ウイilson (Elizabeth Wilson; University of North London)、故マーティン (Richard Martin; The Costume Institute of Metropolitan Museum of Art) らが名を連ねており、国際的に著名な学者をそろえている。 (辻 ますみ)